

櫻齋房種書

榮光堂梓

二編下



泉龍亭是正記

二編中



西庚申通夜譚

石田影長

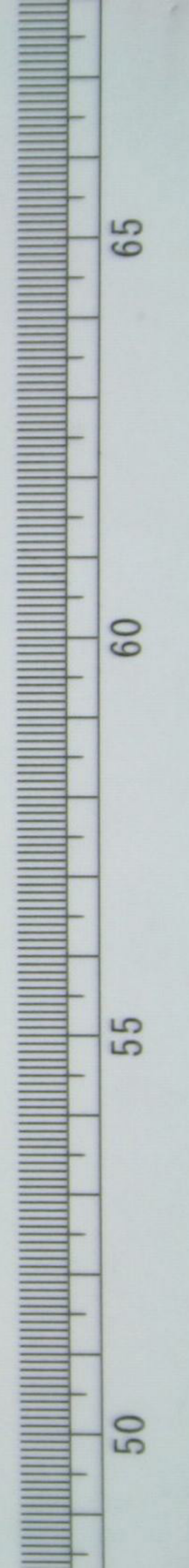
二編上



西遊
庚申通夜譚

后田彫長

二編上



遊西

庚申

通夜

譚

泉龍亭是正記
櫻齋房種画

貳編上
卷

榮光堂梓



春雨の最肅然は軒の玉水隕尽を草の菴に入来る泉龍亭の公羽もて
庚申通夜譚の三編は序文の催促に來つるなり既に初編の評判は去年の
秋の稻穂より十層倍の著述の出来物翁の喜悦の意馬心猿心の駒に乗
來て鞭の替りふ取る筆も申るぞ因縁む西遊記其通俗の形氣を廢止て
大和錦の大倭文字美巖仕立の新奇妙案僕如き不文の序文の水は竹
を継ぐ竹軸の猿毛の筆で猿系圖猿は素是灵獸ふて神は猿田彦の
尊なり猿丸太夫の和歌は名高く橋は猿橋の名橋なり河は猿が股
の深淵あり猿猴の擲は水の大陰影と掌小握る神通も又廣大なり
冀い開卷小姐介公子達猿物語と侮りて等閑は勿看做と人並より
筆の毛の三本不足拙文と其俣序文は換る小難舞

明治十三年三月

葛飾隠士菱花序



唐土大皇帝の
勅使三藏法師

寶藏国の女百花差
碗子山波月洞の
妖魔が子小強





○再脱さそも玄奘
 之を長安城に別れと
 昔は清きあれた縁の
 事ともわらざりて始者二人を
 引具て白馬に跨りて数日を伴て
 唐の西の東の地の事を語り合ふ
 うは日常を笑ひ月を看りてとちりちり
 らちせりしう思ちて終白馬ふ赤き
 返者流共二ツの

▲元よちち入りとうらかゆふせ
 とむせしる大

大少の異より
 さも柳
 権の

海舟二一



三藏法師の徒
 流沙の悟僧



五ノ月

五ノ月

つぎ 鉄金花帽を
長老は五更再び
みの四しと死
さき花帽をい
自らを教習
と思ふ必
らそ思ふの
ふ修下と
が身よほど
定んまの呪文
と接ひは呪文と
緊縮呪と
忽ち身もち
光りて



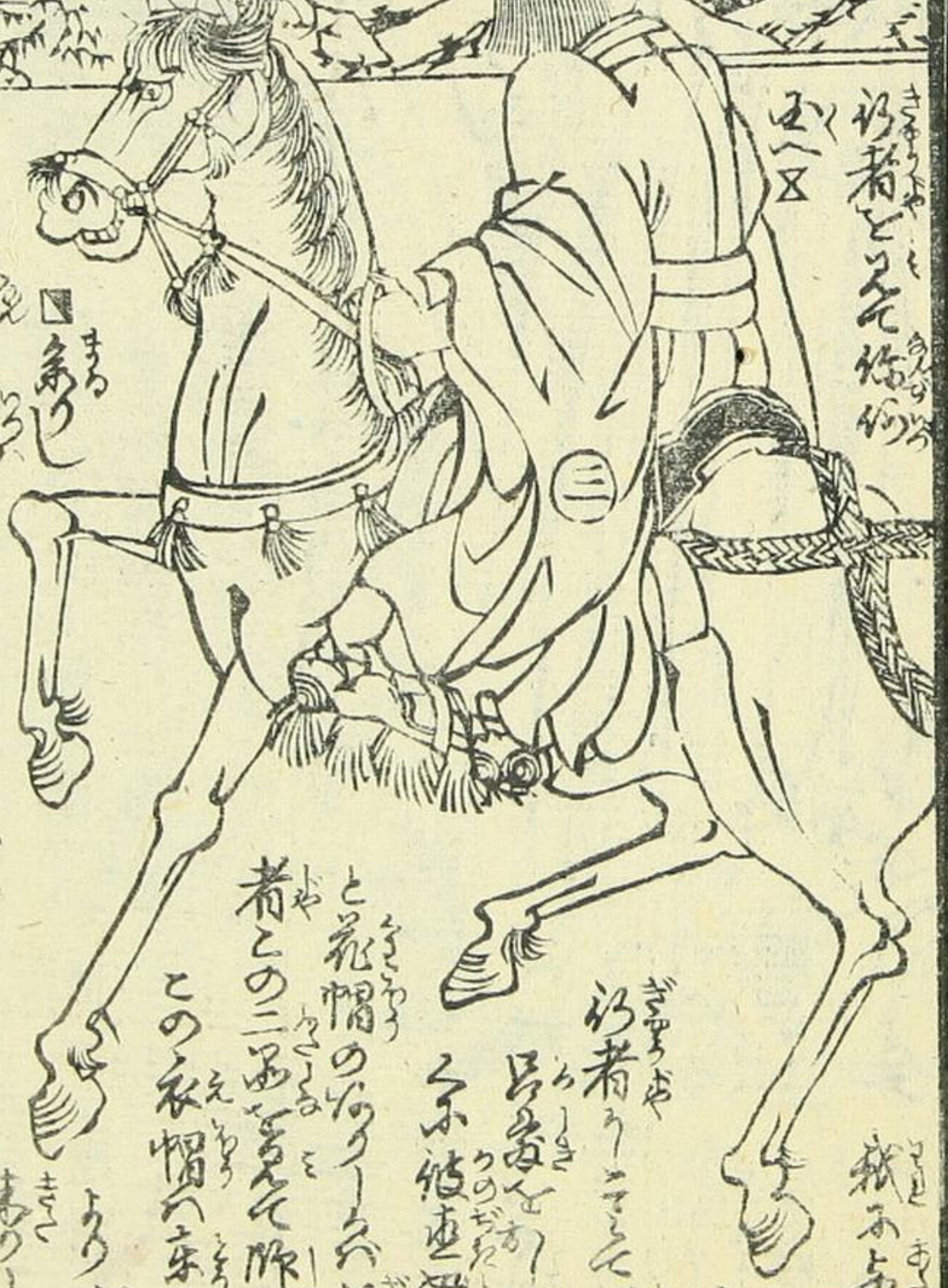
△此者の海を
雲よりち
純玉の元へ
行者が
ふとま
且此者大い
△此者の海を
雲よりち
純玉の元へ
行者が
ふとま
且此者大い



△此の
是れ
花の
を
け
空あり
難く
香を
礼
重
帽を
袋の中
柄杓



△此の
是れ
花の
を
け
空あり
難く
香を
礼
重
帽を
袋の中
柄杓
△此の
是れ
花の
を
け
空あり
難く
香を
礼
重
帽を
袋の中
柄杓





銅版開化七編

全開化女用文章

近世紀聞
夜嵐阿鬼怨花仇夢
五編

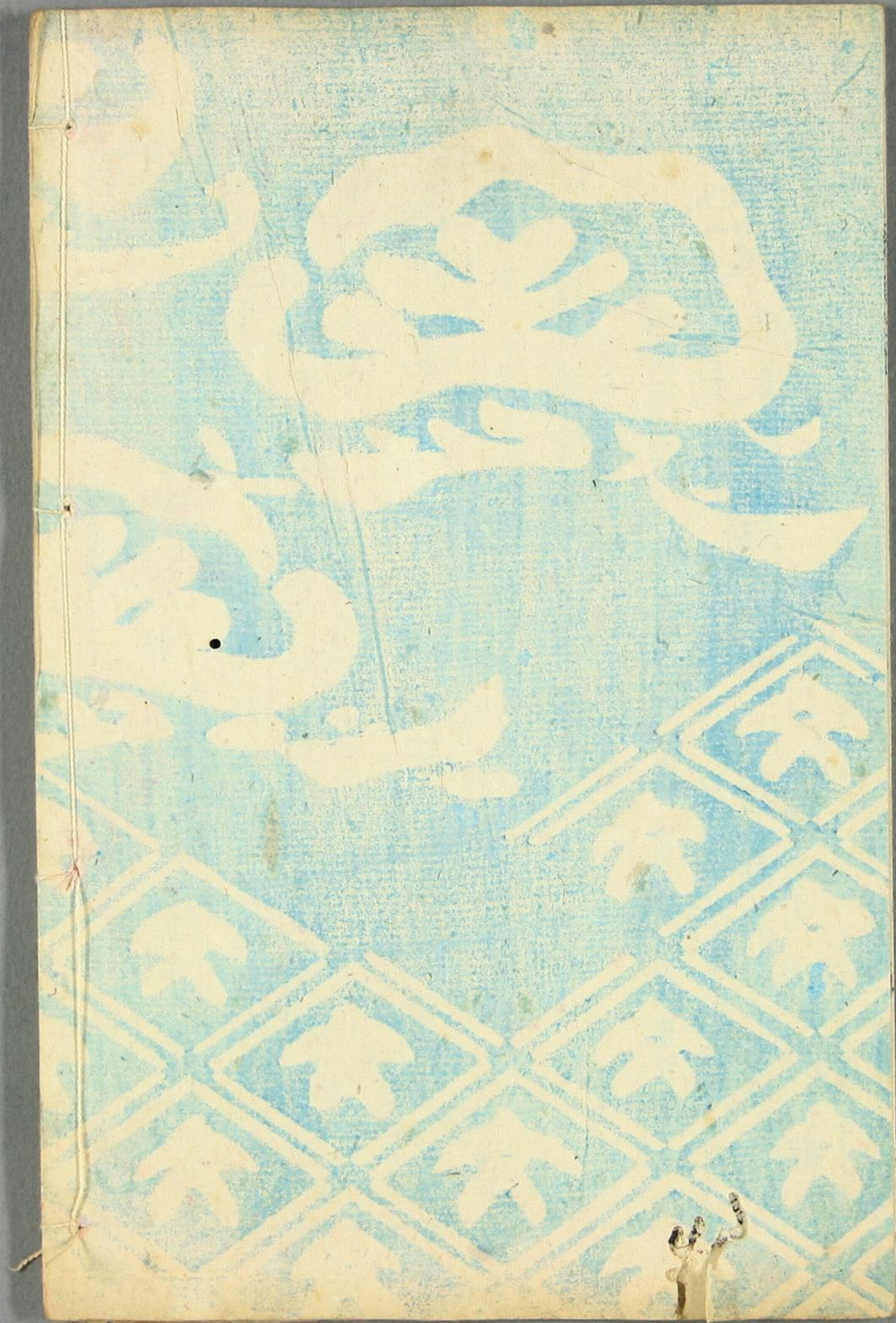
義烈回天百首
全金花七變化
大編

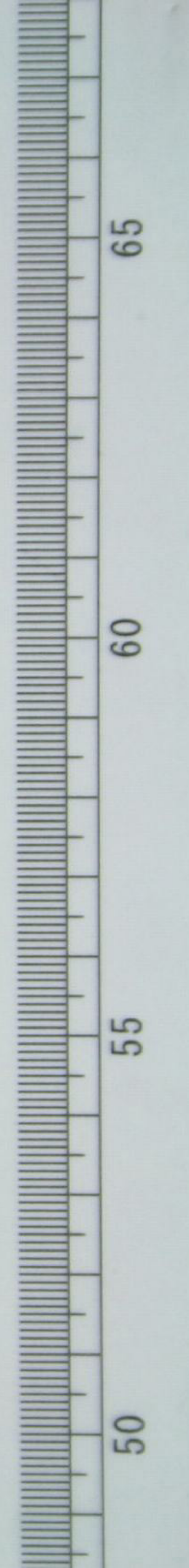
伊呂波字引
全濡衣女鳴神
大編

出校御旨明治五年五月書
日本橋區米沢町一丁目番地

錦繪問屋
金松堂
出校人辻岡文助

010190516941







又懐之と云々
 又懐之と云々
 又懐之と云々
 又懐之と云々
 又懐之と云々

一人の女
 一人の女
 一人の女
 一人の女
 一人の女

此の山と蛇
 此の山と蛇
 此の山と蛇
 此の山と蛇
 此の山と蛇



又懐之と云々
 又懐之と云々
 又懐之と云々
 又懐之と云々
 又懐之と云々

一人の女
 一人の女
 一人の女
 一人の女
 一人の女

此の山と蛇
 此の山と蛇
 此の山と蛇
 此の山と蛇
 此の山と蛇

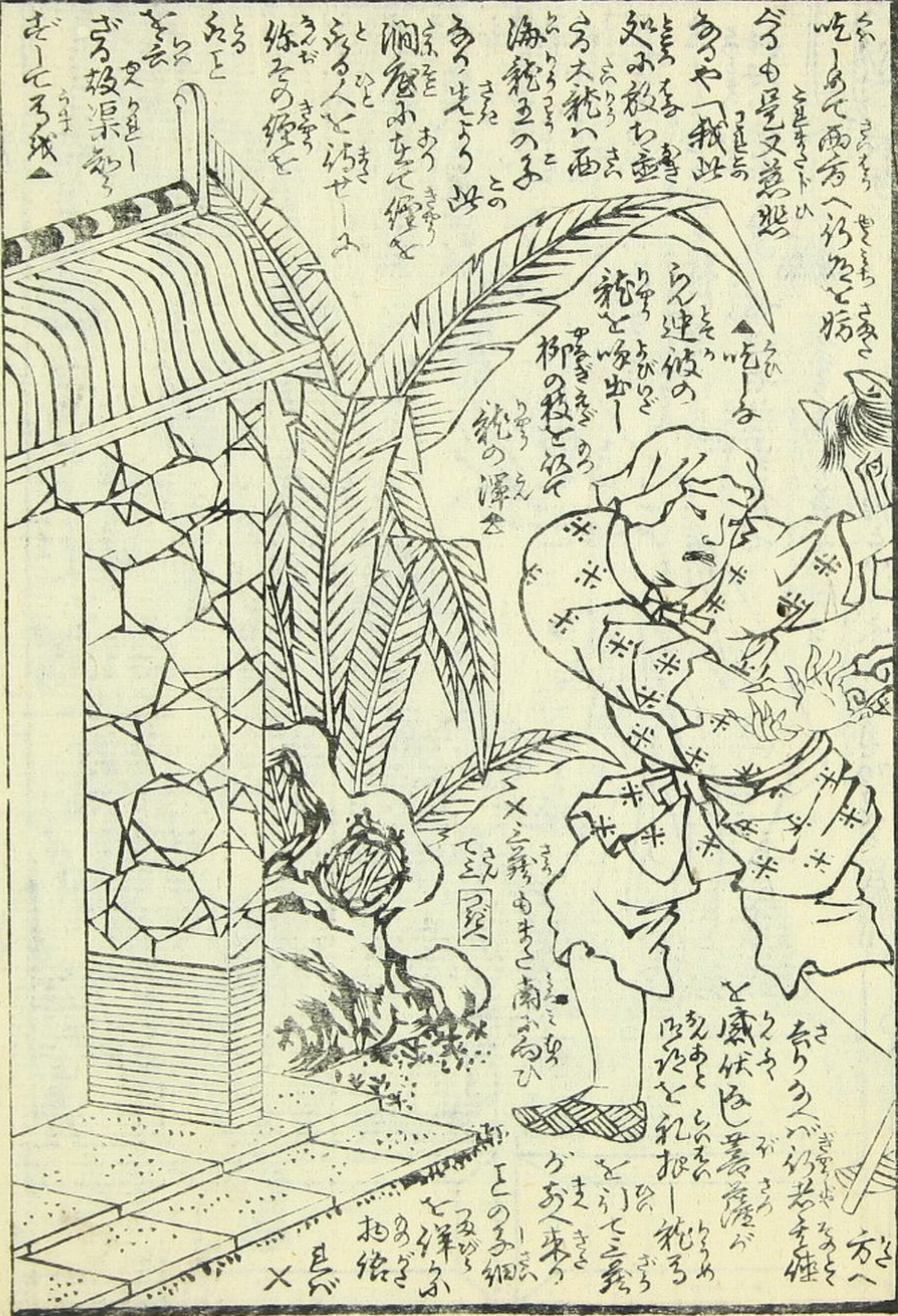
つぎ 観音菩薩は若の老を出現表ゆふと見て忽ち
 聖つて云やう妹は日々天意地の教りよ
 一の心をむを教むた信ふと教りせ
 善修し際維徳とやんと教り我
 忍と痛きむの折々の慈悲
 あるや「你仏門の
 善修し」
 ありて天とと聞き
 一見体又因果を信す
 せん我慈悲心あり「慈悲心
 今この善修し悪報と
 故ち善修し我師父の言と



△此と根ひあ人の思ひ
 一七の松とて又
 又折の糸とて指し
 者か否の
 後心の
 根の毛と色信ちり大
 孫よ奪る此時之ハ

南の
 の毛根
 一七の松とて又
 又折の糸とて指し
 者か否の
 後心の
 根の毛と色信ちり大
 孫よ奪る此時之ハ

吃しあて両方へはなると病
 今ゆも是又慈悲
 あや「我此
 知ふ教ち盡
 方大統の西
 海統王のま
 あつ先より此
 洞窟ふなを信を
 とひと
 信を人よ信せし
 信その信を
 とひと
 信を



△此と根ひあ人の思ひ
 一七の松とて又
 又折の糸とて指し
 者か否の
 後心の
 根の毛と色信ちり大
 孫よ奪る此時之ハ

さし
 信を人よ信せし
 信その信を
 とひと
 信を

つきおほるま

三月
あまのついで

あまのついで
あまのついで



旅の宿主人
面をくまを山
里とあるお一人の若衆のり
お一人をりつと孫の者引止
此処の地名はふと唱るや彼男は
先づこの一亦休むれり

旅の宿主人
面をくまを山
里とあるお一人の若衆のり
お一人をりつと孫の者引止
此処の地名はふと唱るや彼男は
先づこの一亦休むれり

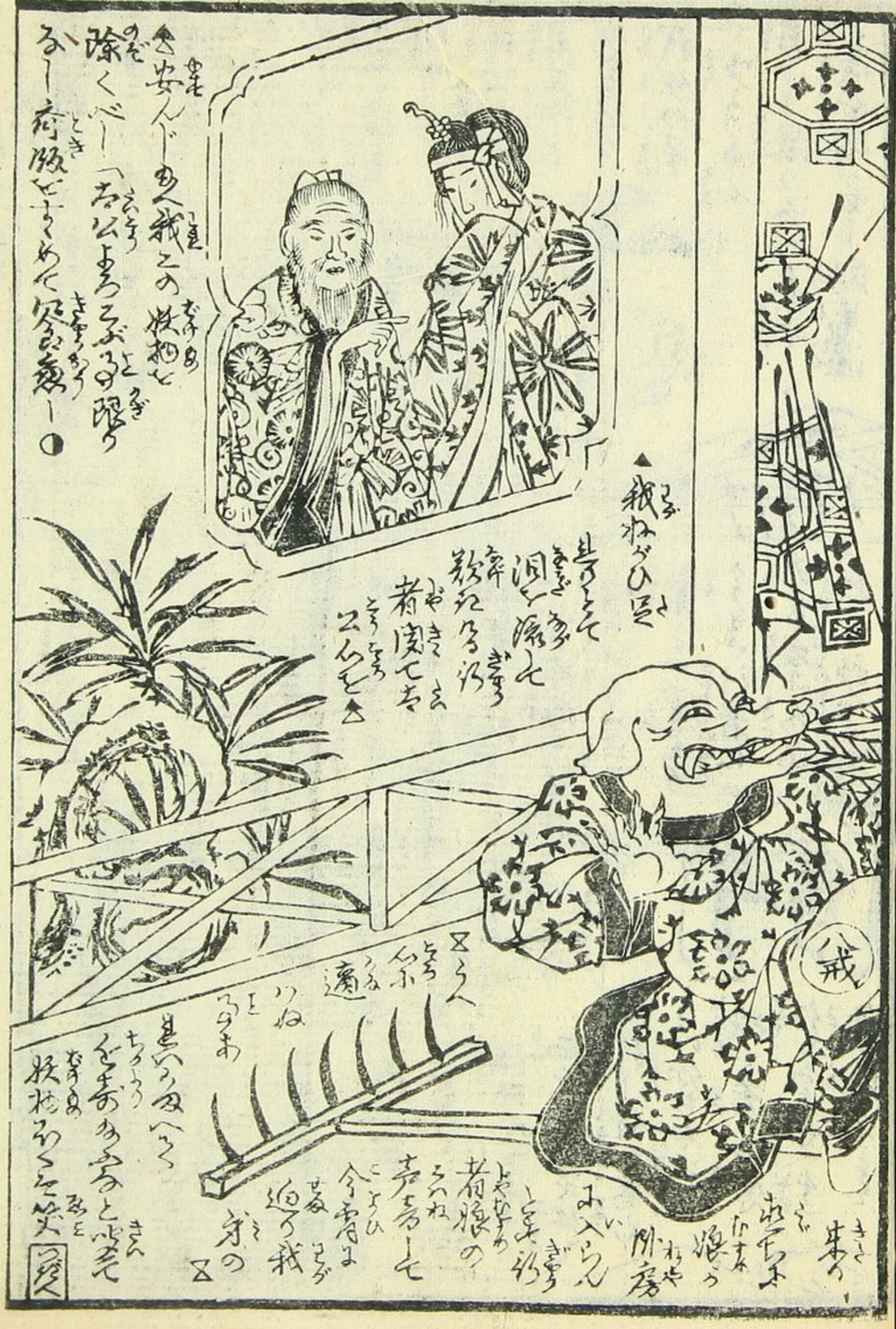
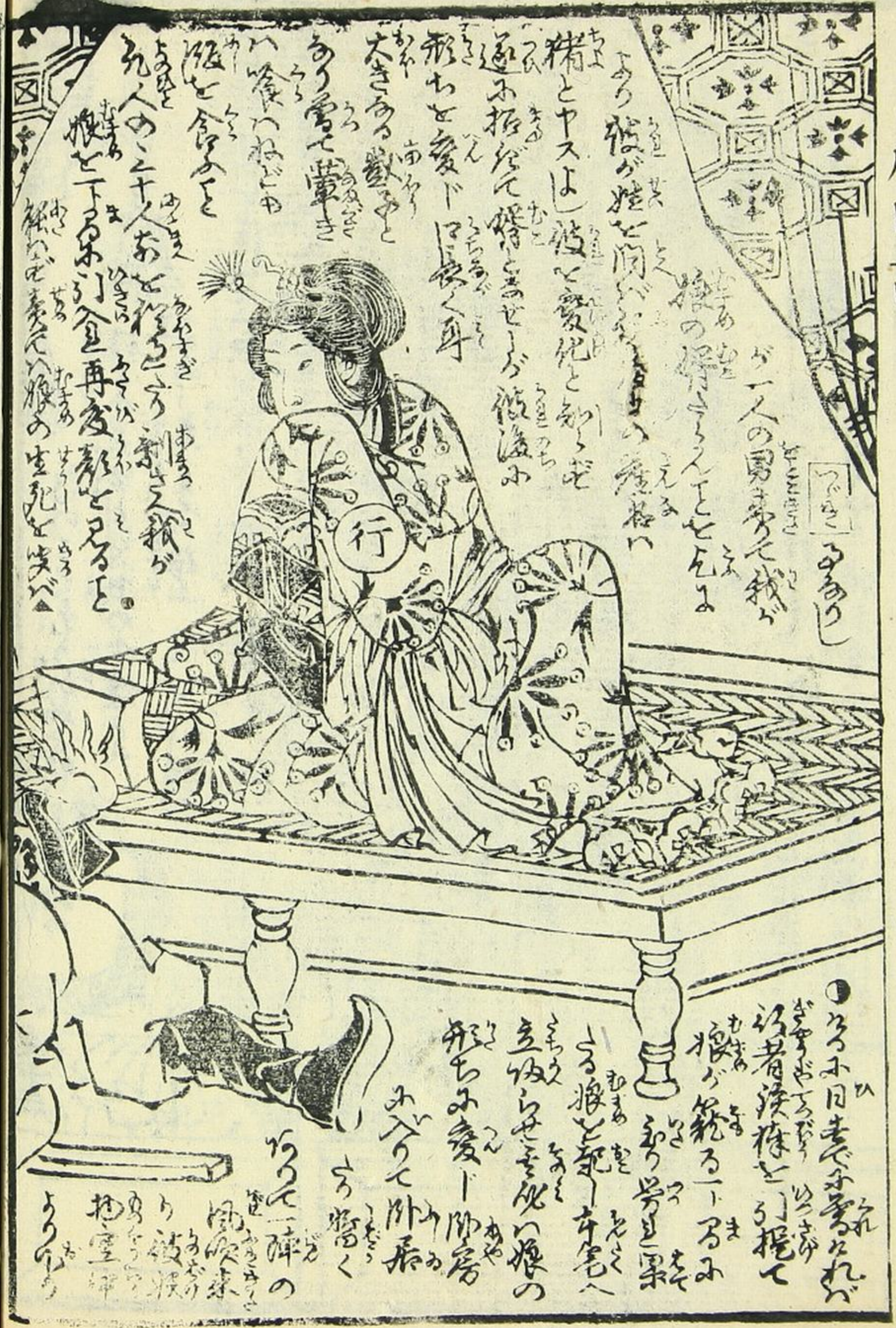
おのどくをりつや
侍人言ふと
おのどくをりつや
侍人言ふと

おのどくをりつや
侍人言ふと
おのどくをりつや
侍人言ふと



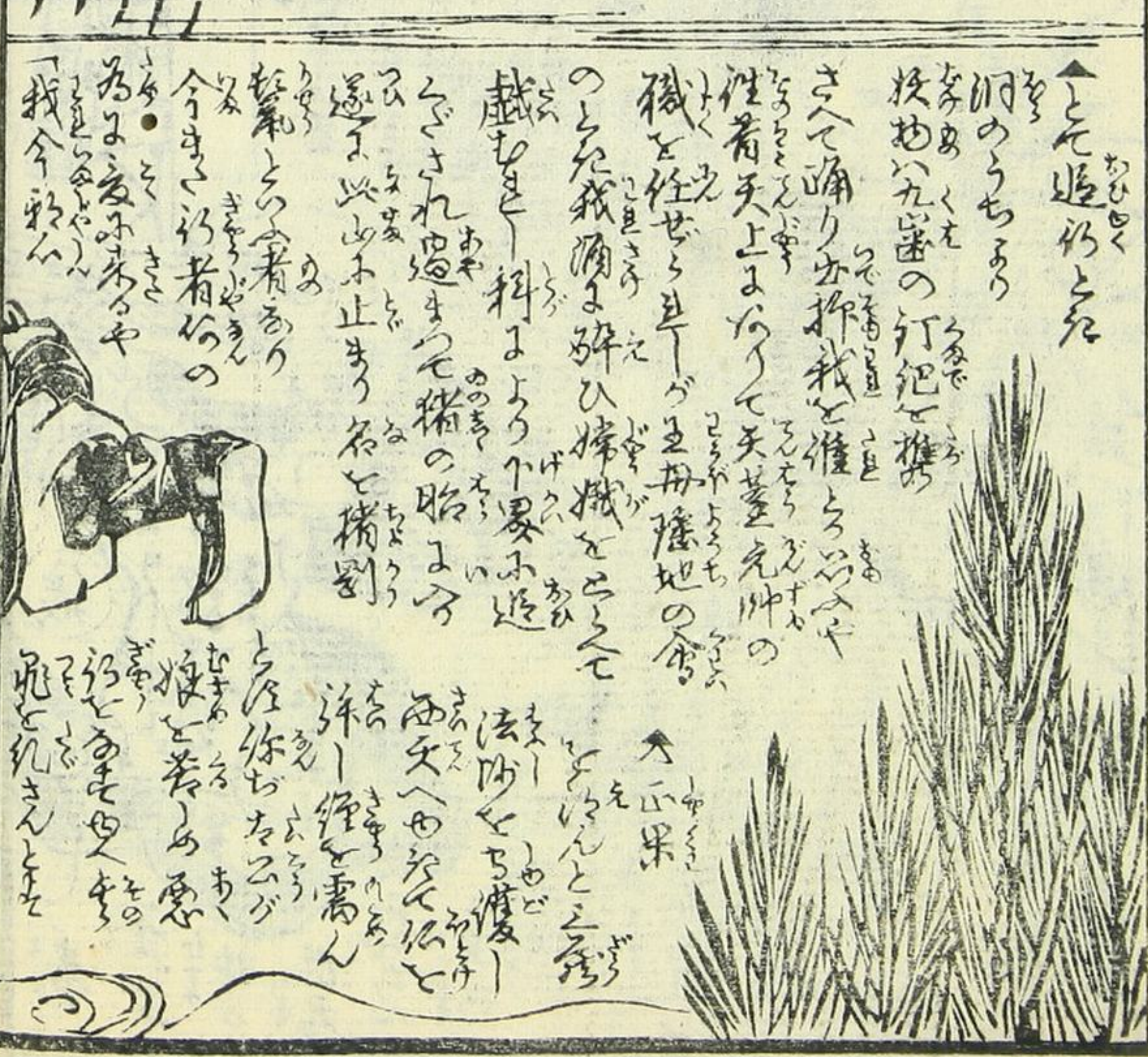
おのどくをりつや
侍人言ふと
おのどくをりつや
侍人言ふと

おのどくをりつや
侍人言ふと
おのどくをりつや
侍人言ふと

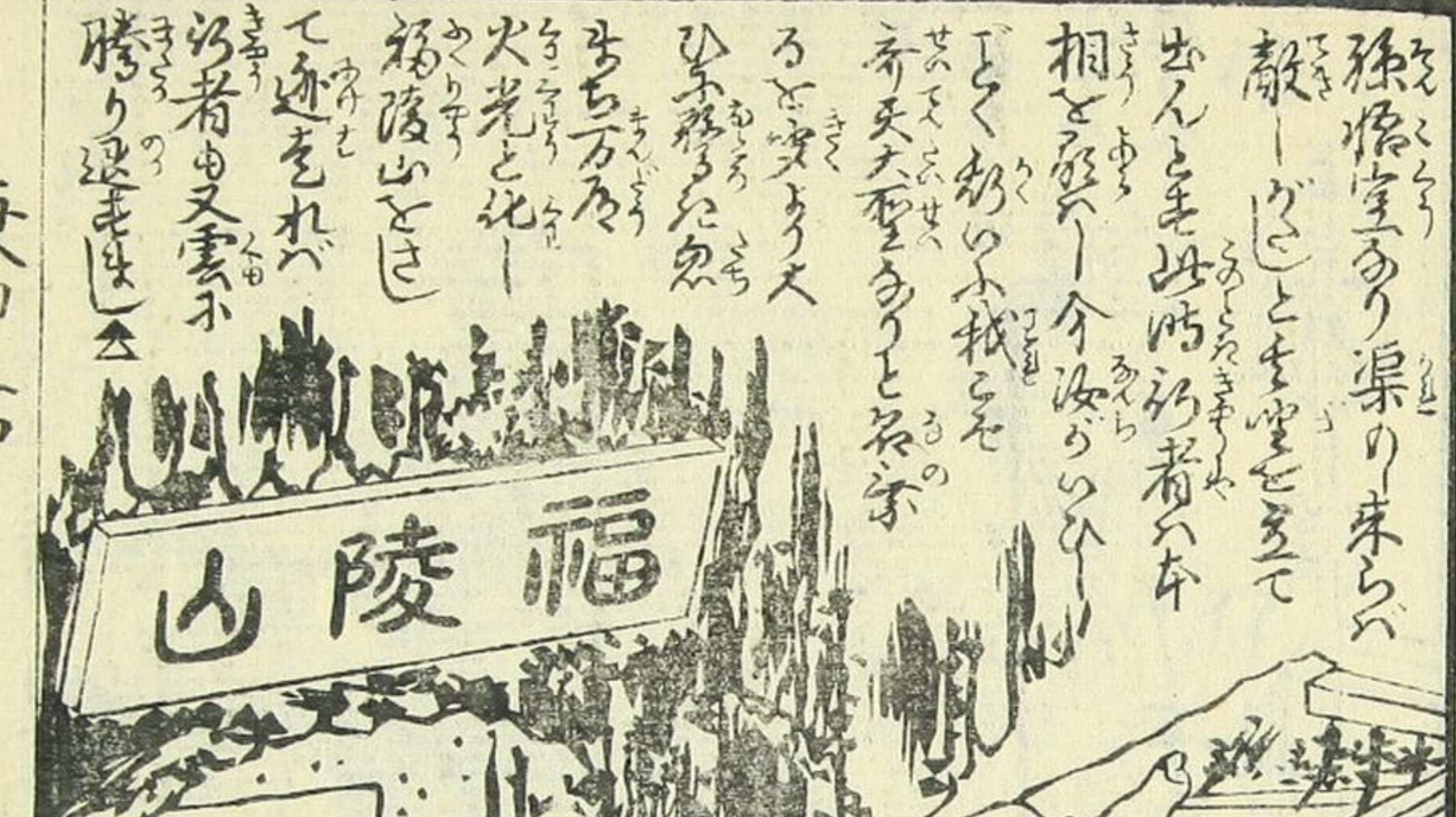




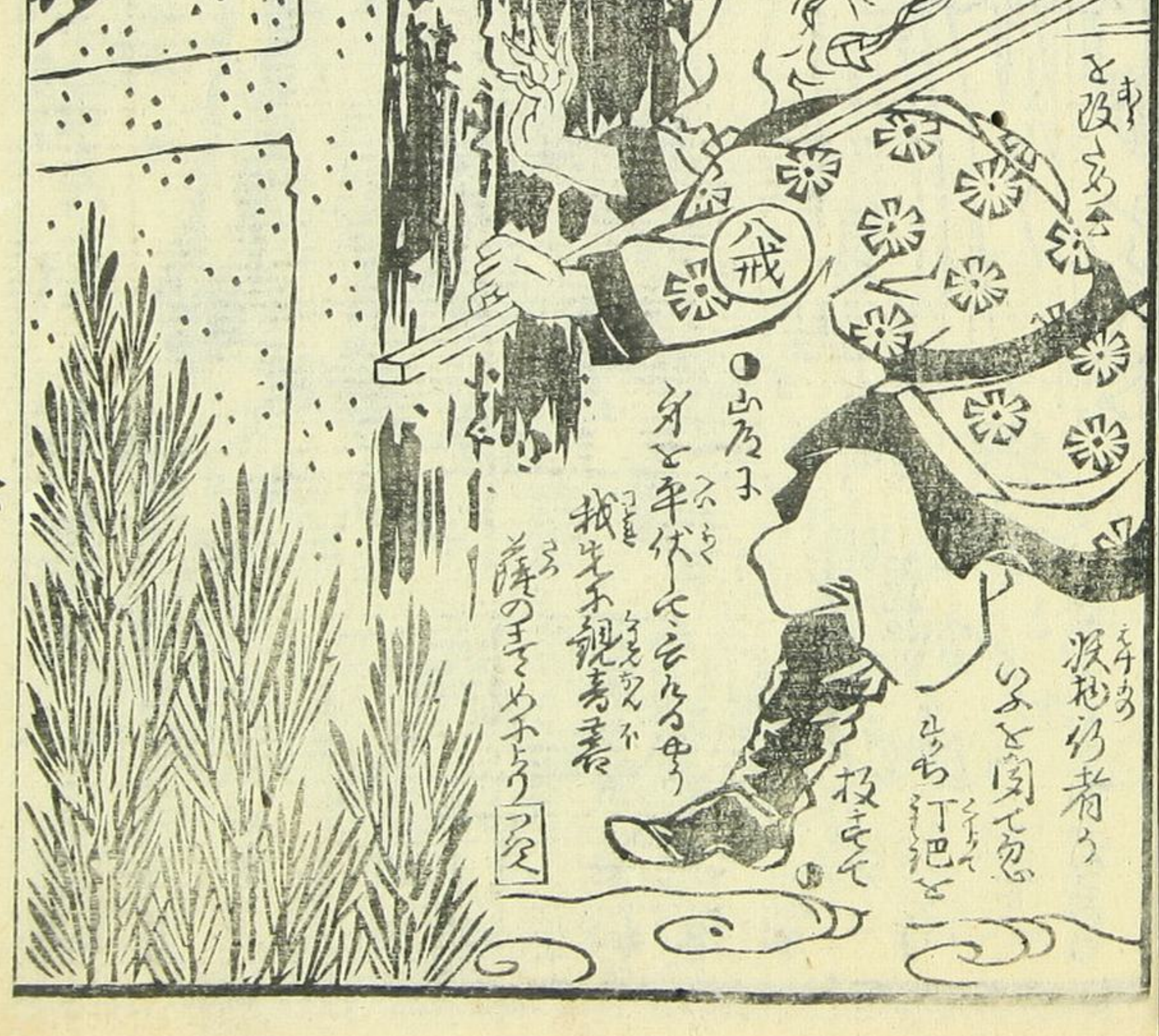
「我が身は」
 我父の身
 怪
 うを
 いせ
 香
 カの
 神と
 君と
 めん
 我
 と
 天宮を
 瀧馬湯



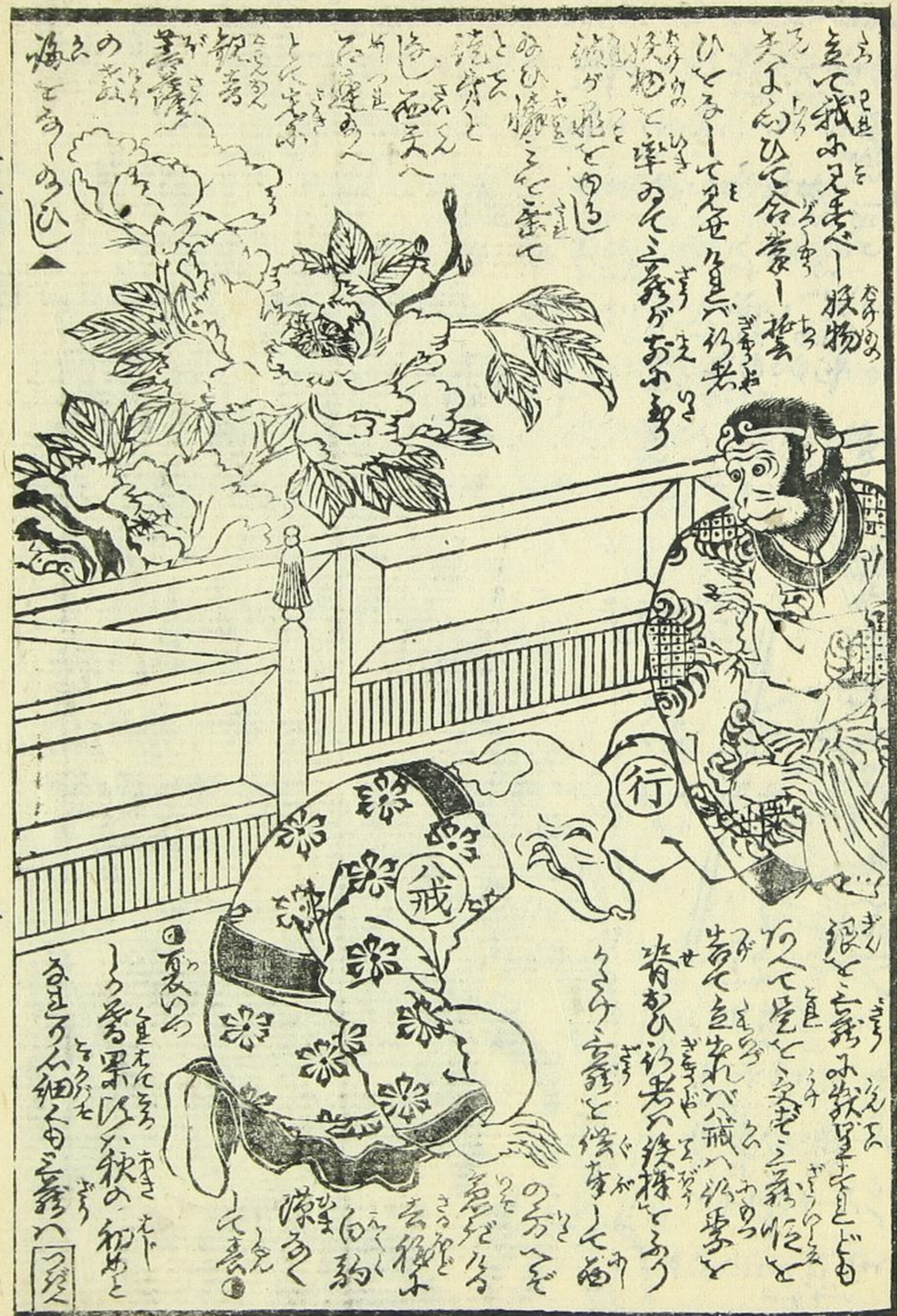
「とて追ひたる」
 洞のうら
 枝の
 さへ
 性者
 穢を
 の
 戯
 と
 遂
 驚
 今
 為
 我
 飛



「福陵山あり渠の末らひ」
 敵
 出
 相
 丁
 希
 る
 ひ
 ま
 火
 福
 て
 以
 勝



「戒」
 山
 身
 我
 薩



此の世に
 立て我ふ兄弟
 夫よのひに合
 ひとるして
 後物にて率
 流が飛をゆ
 みの勝とて
 流分と
 此の世に
 立て我ふ兄弟
 夫よのひに合
 ひとるして
 後物にて率
 流が飛をゆ
 みの勝とて
 流分と

戒よよへ亦二百両の
 一匹を八
 の袋
 綿
 妻と
 草鞋
 此の世に
 立て我ふ兄弟
 夫よのひに合
 ひとるして
 後物にて率
 流が飛をゆ
 みの勝とて
 流分と



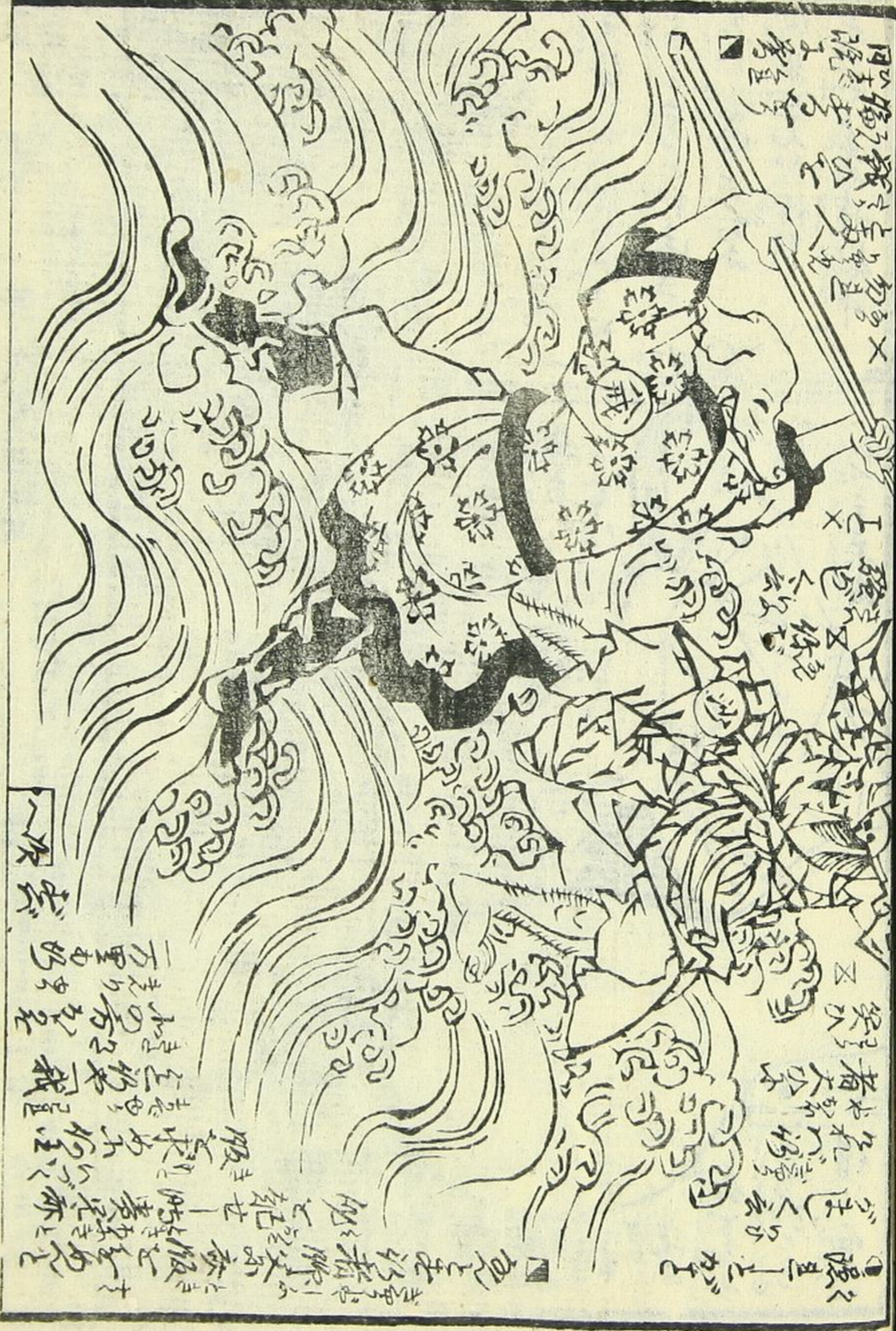
行き東より
 経て多くと
 うい西天より
 伝とねえん
 とは久
 小坊と
 良久一預
 我と引て
 師よす
 一休
 偽り
 ひと

高
 三
 太公娘
 此の世に
 立て我ふ兄弟
 夫よのひに合
 ひとるして
 後物にて率
 流が飛をゆ
 みの勝とて
 流分と



戒逃す之如て逃る水中小
 門上之向て水懸し逃る心
 物之類又と本物たる物
 名有り紅包之門宛り如て
 推之能く生中より戒直心
 頼頼と一筋を一本の束杖に
 途途と一個の袋物垣より
 攀攀と一由一線山の頂
 中中と一水之渡之之河
 知知と一光星朝と流砂の
 度度と一足之歩
 大河の岸よりその
 度度と一歩の歩
 橋を渡りて
 二の段より

自に又戒ふ
 千念より
 戒ゆる級は
 水より下り如て
 生か脱由
 戒逃る
 水向より
 生か脱由
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る



戒逃す之如て逃る水中小
 門上之向て水懸し逃る心
 物之類又と本物たる物
 名有り紅包之門宛り如て
 推之能く生中より戒直心
 頼頼と一筋を一本の束杖に
 途途と一個の袋物垣より
 攀攀と一由一線山の頂
 中中と一水之渡之之河
 知知と一光星朝と流砂の
 度度と一足之歩
 大河の岸よりその
 度度と一歩の歩
 橋を渡りて
 二の段より

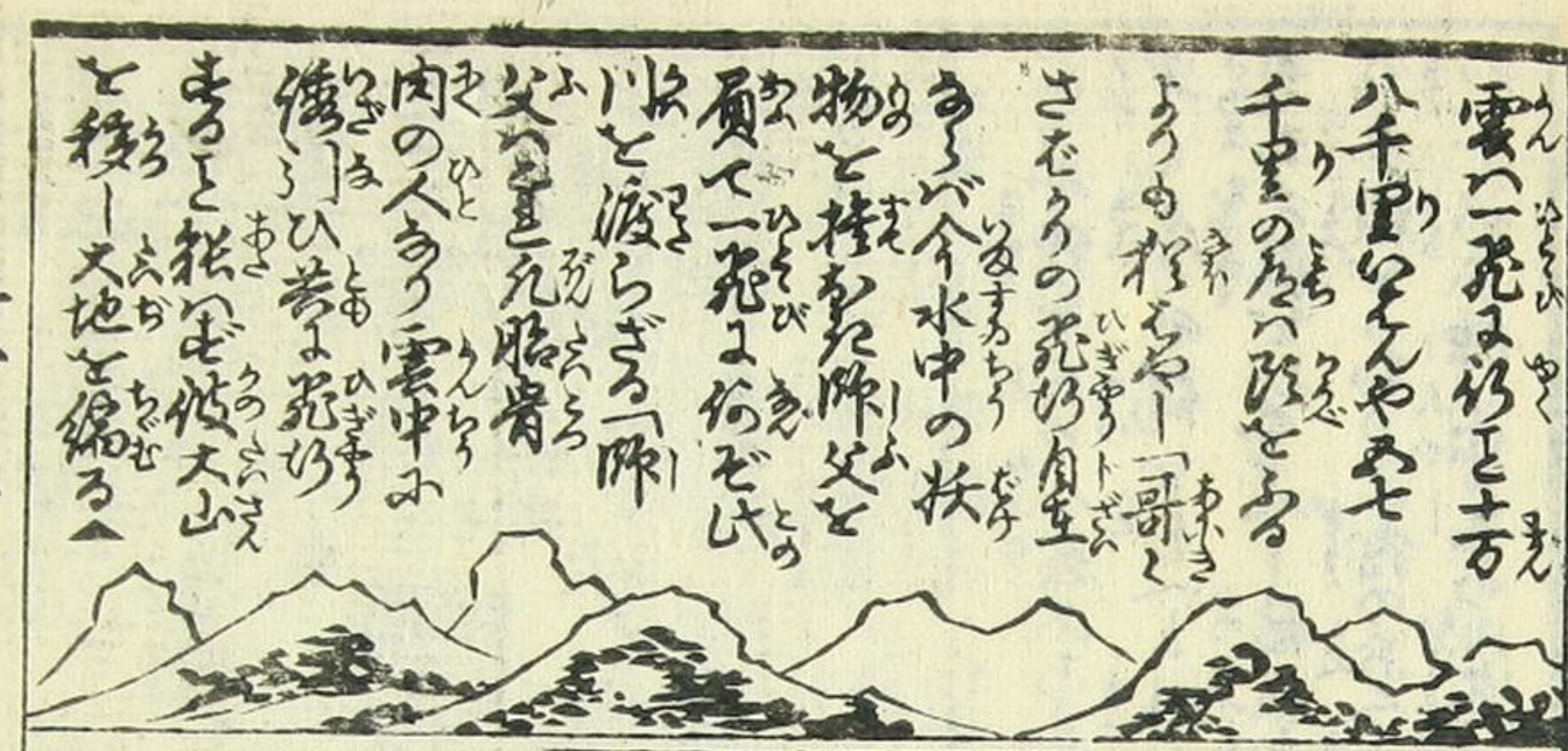
戒逃る
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る
 戒逃る



大いふ笑ひ侍らゆりて
 云とあらはれお遠き
 乃と物所のうちわふ
 性来と見や、侍ら
 赤く知るとも我勸斗

法よ
 我よ
 水

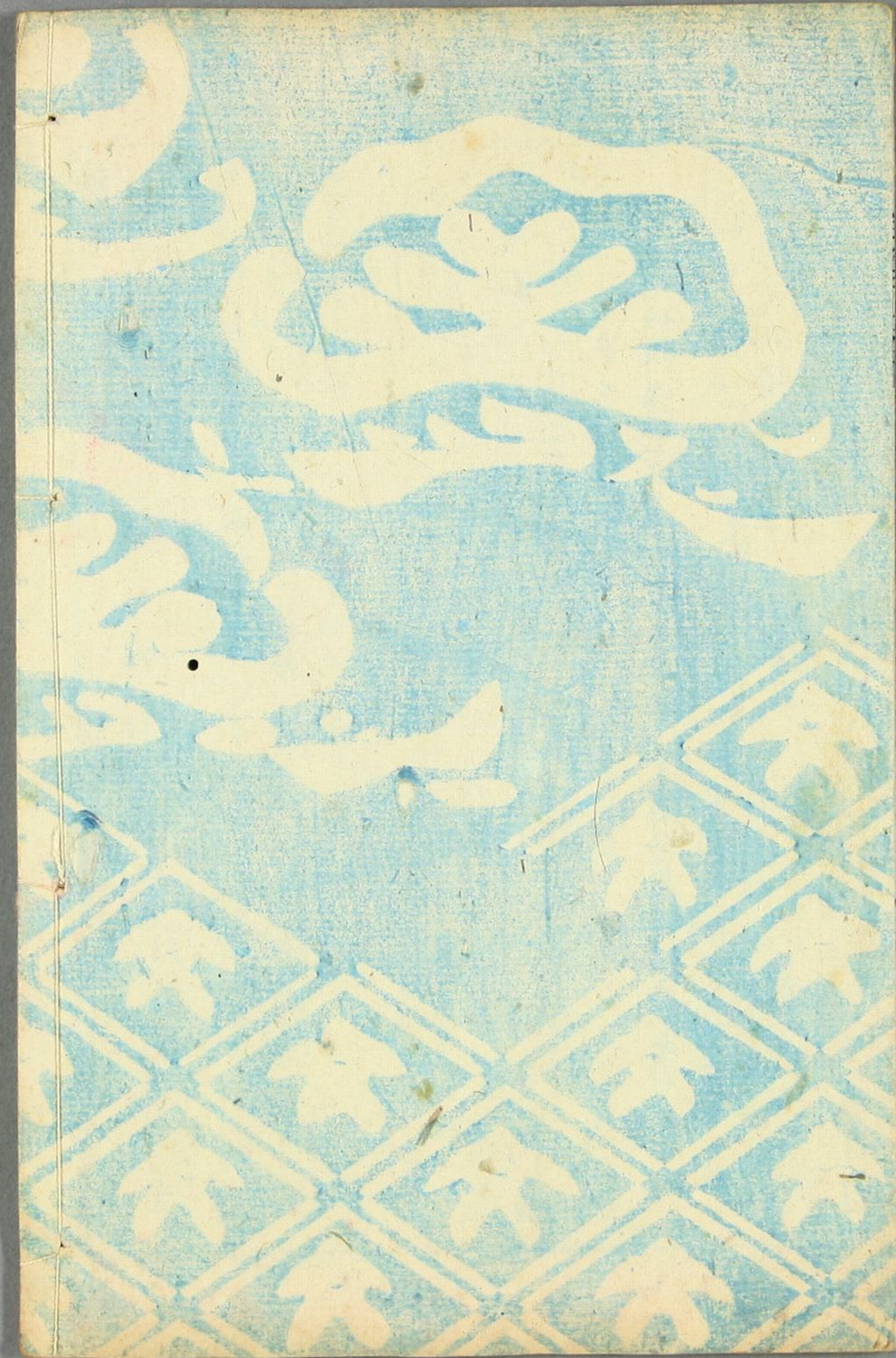
怪お除く
 中、保つて
 一と、軽
 ひな、直
 善、善
 笑ひ、せ
 の、流
 河、の
 扶、拍
 赤、不
 善、を、め
 獲、一、美、一

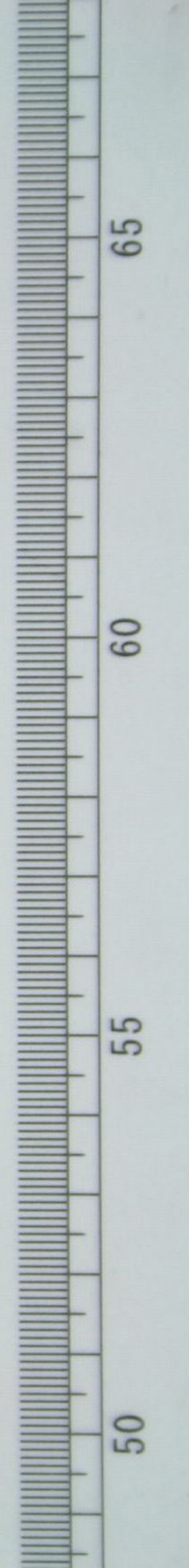


雲一花より正十方
 八千里のそらや七
 千里のそらにさる
 ようゆねとる一、哥と
 さむろの、花の、自
 今、水、中、の、杖
 物と、杖、を、た、隙、を
 質、一、花、よ、は、ぞ、け
 川と、渡ら、ざる、隙
 父、の、ま、た、九、胎、骨
 肉、の、人、あり、雲、中、の
 徳、ひ、ひ、若、く、花、ひ
 才、と、松、金、彼、大、山
 と、後、一、大、地、を、編、る、一

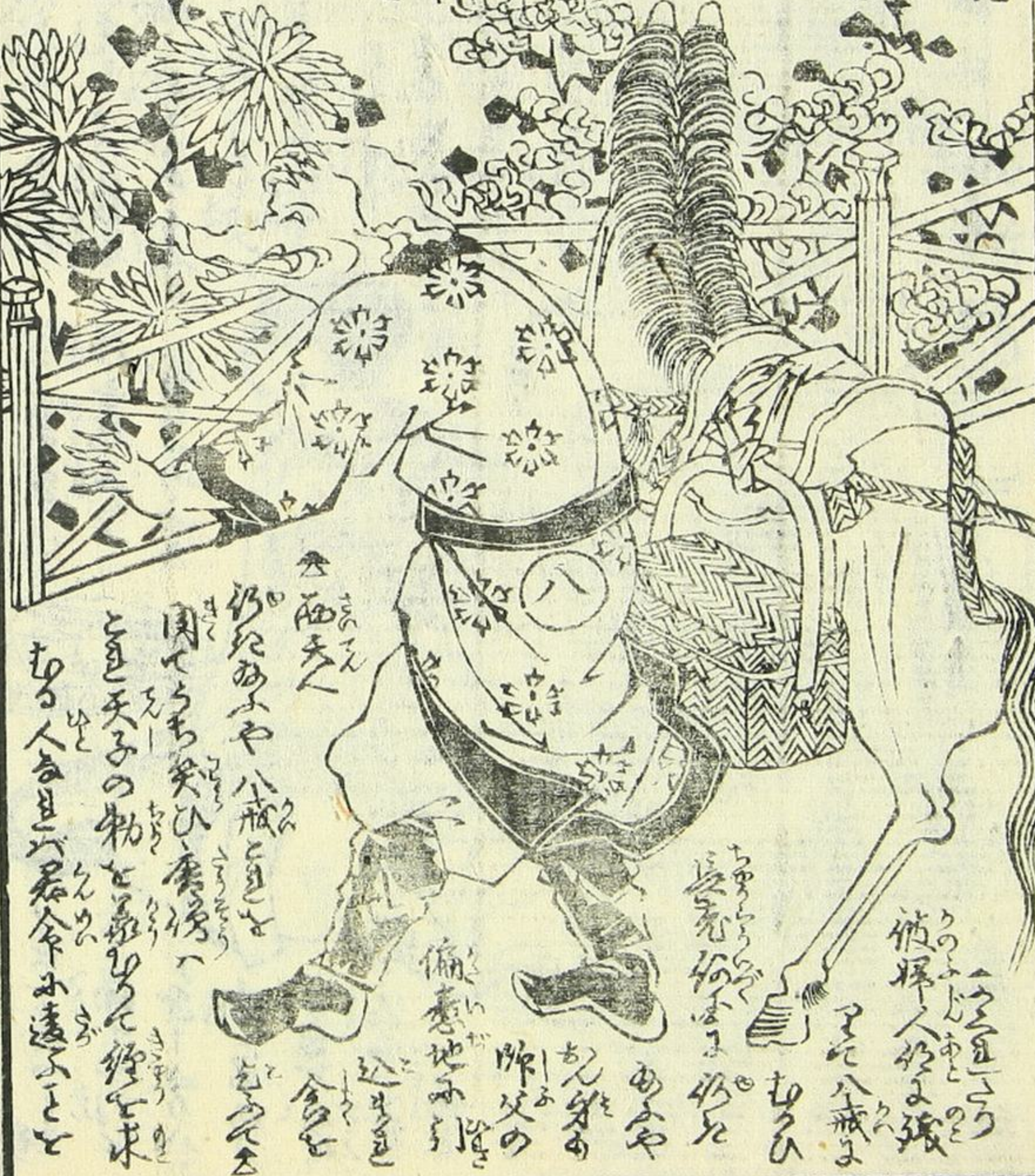
松、脱、せ、る、人、と、携
 へ、一、歩、も、動、く、と
 根、を、只、隙、の、免
 命、と、も、惜、し、我、ら、が
 業、果、の、ほ、る、と
 竹、斗、り、あり、と
 人、の、縁、り、合、さ、る
 一、夜、の、明、し、明、た、る、露
 み、き、て、若、者、の、勸、斗、雲、不
 ち、ぐ、り、一、花、よ、善、陀
 落、山、紫、河、林、よ、あり
 善、善、を、ね
 一、流、河、の、

行
 又、と、れ、本
 久、さ、れ、本
 と、路、と
 善、善、を
 用、あ、る
 一、と、善
 徳、さ、る、ぬ
 彼、れ、を、
 一、と、善
 善、善、を
 一、と、善
 善、善、を





つぎききや作らき
 湯きるとも自ら
 けあるひもま
 身もあやうが此
 ちを便多た
 あり肌を
 時のもよ人を
 あると終入
 我との馬をも
 草への冷入
 松云あくら
 けとあて
 必者
 てこの獣子
 愛へ

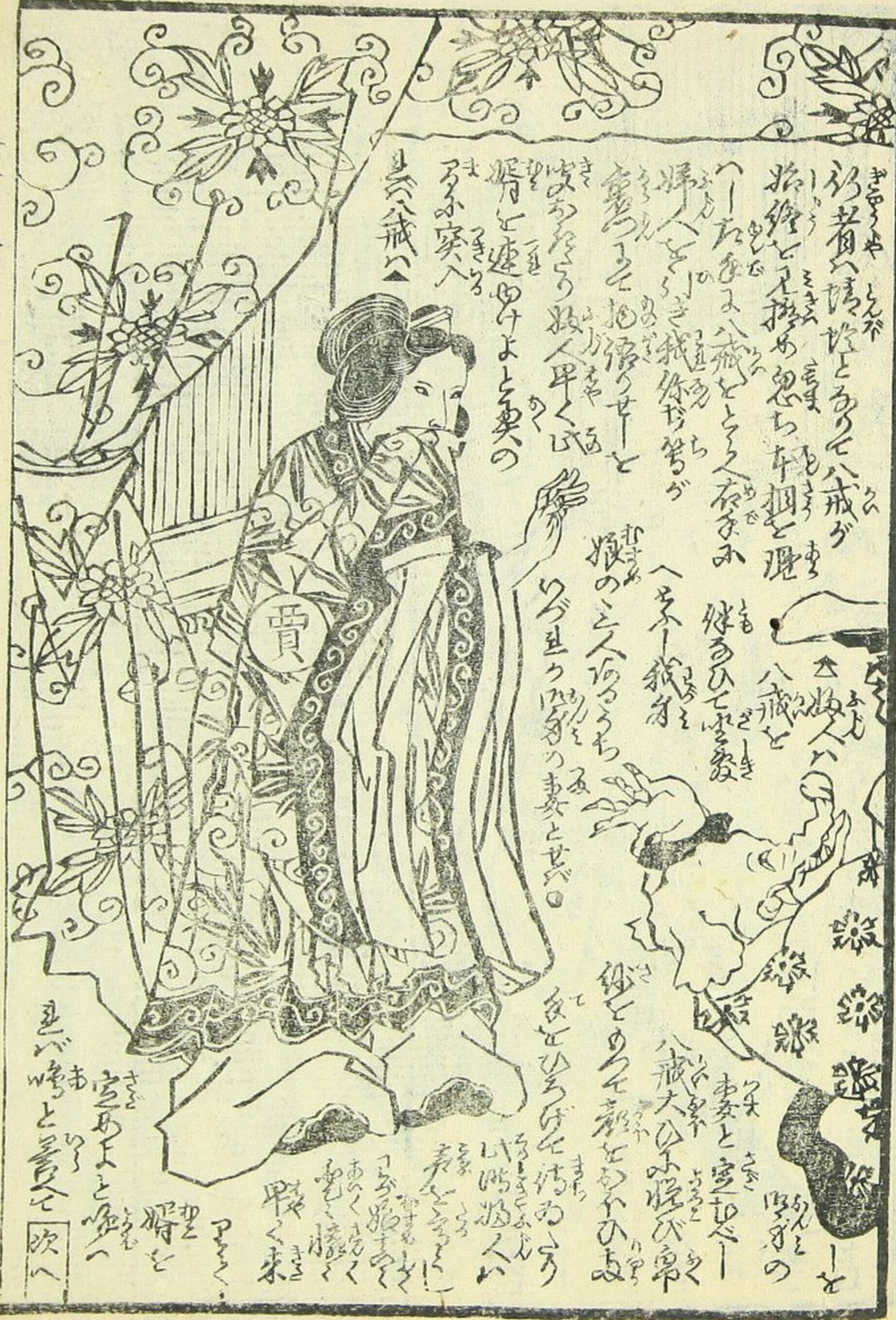


西天
 仍たあふや
 因てら
 と道天子の物
 ちる人
 彼輝人
 又公
 ちるひ
 あふや
 昨父の
 偏意地
 今を
 ちるひ

つて見るべ
 一の精輪と化
 公戒が
 さふと
 公戒の馬
 草と
 とむせ
 雲の
 何か
 人の
 の花
 て居
 増と
 とる
 じけ



世は
 うま
 昨と
 人の
 年
 あり
 ひ
 我
 ぞ
 せ



初者へ誘はせとありて八戒が
於終て是れあ忽ち本相を隠
へたるを八戒ととて之をみ
婦人として我れは皆が
業のしを拒絶せしと
けぢなれん人甲くは
腎と速ゆけよと奥の
るみ突へ
また八戒へ

八戒と
婦人の
心と
八戒と
婦人の
心と

八戒大の八戒の
婦人の心と
八戒と
婦人の
心と

賈
八戒と
婦人の
心と



つぎ入る後
と腰つと
押問き花火
の光り辺
とし波打
之の根と後
かひしがま標致の
よのろま織眉と
画き写面表を生
また傾きのまわう戒との美女
と又のうらも研るだては此

行
八戒と
婦人の
心と
八戒と
婦人の
心と
八戒と
婦人の
心と
八戒と
婦人の
心と
八戒と
婦人の
心と
八戒と
婦人の
心と

このついでに
大宗の
彫りの
み久宗の
江田八百重

大かつりて
我一人
我を
我を

つとを
つとを
つとを
つとを

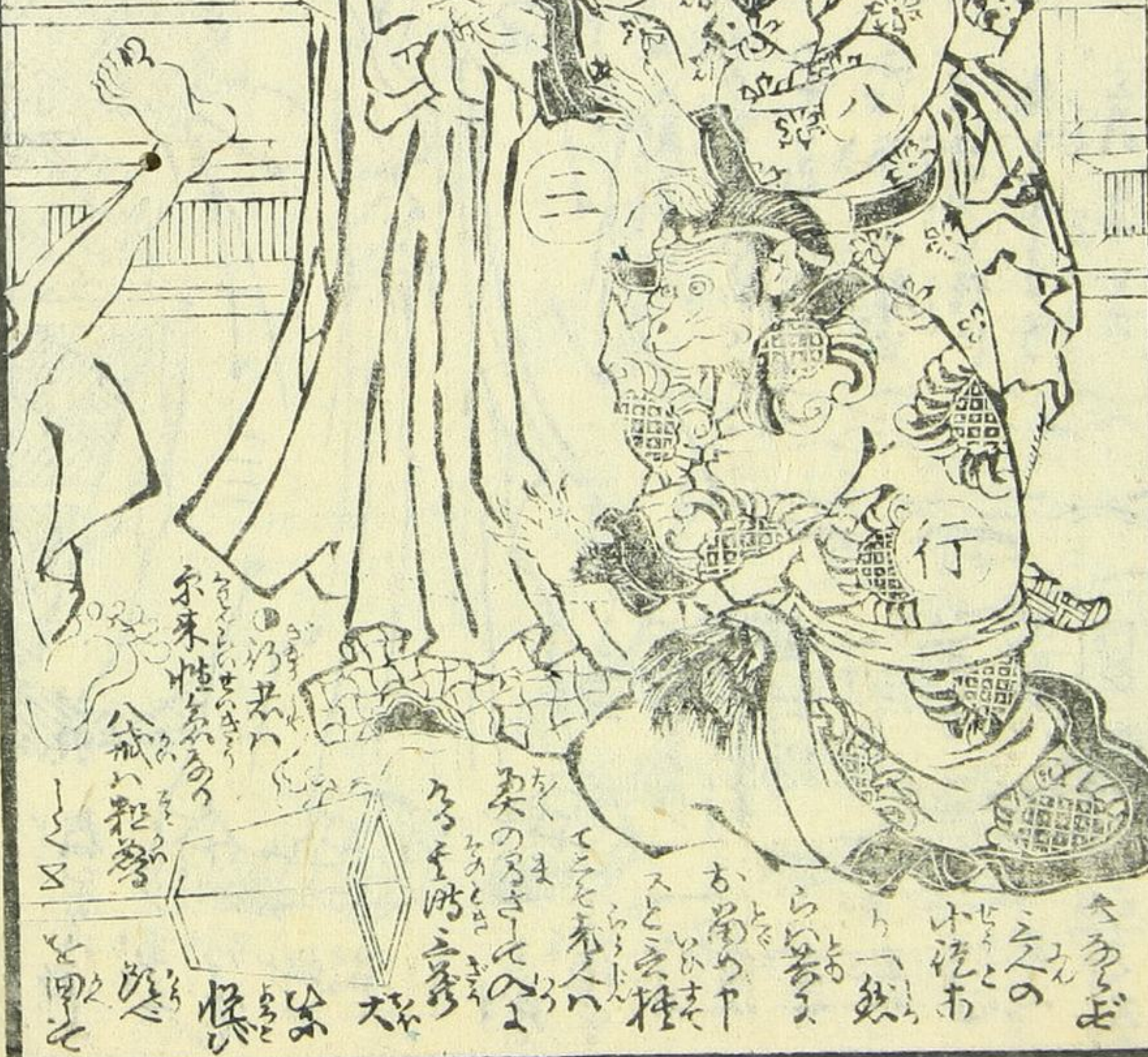
二
二
二
二

このついでに
大宗の
彫りの
み久宗の
江田八百重

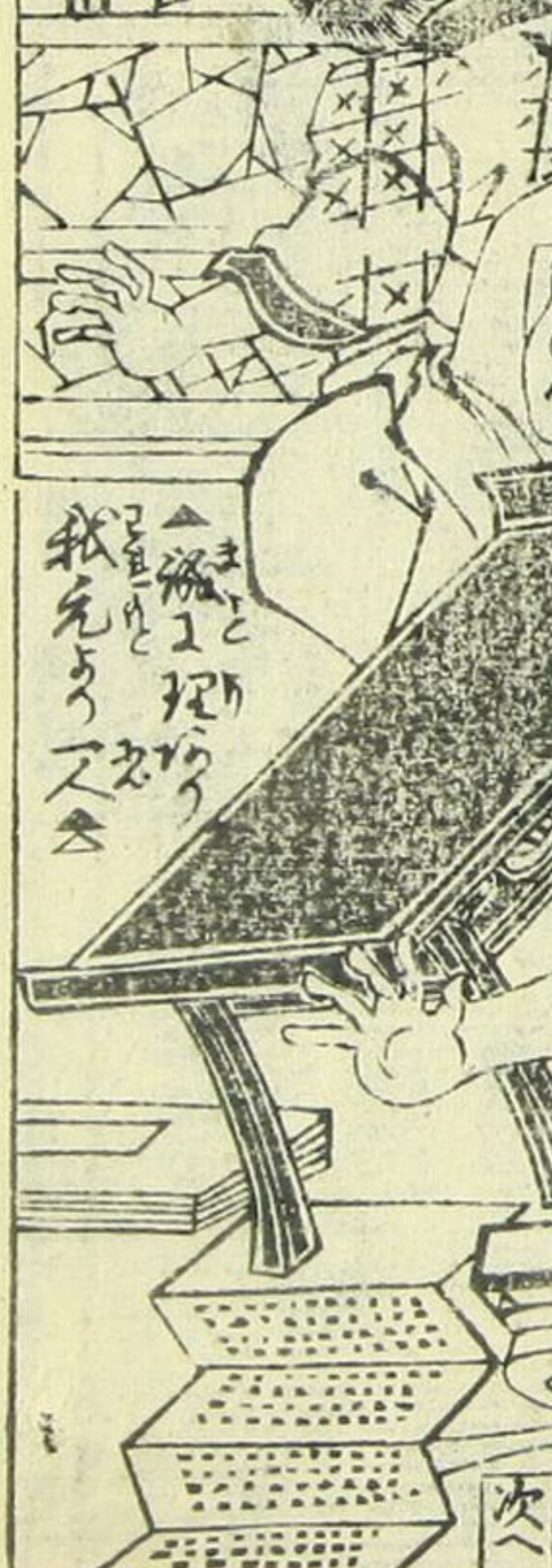
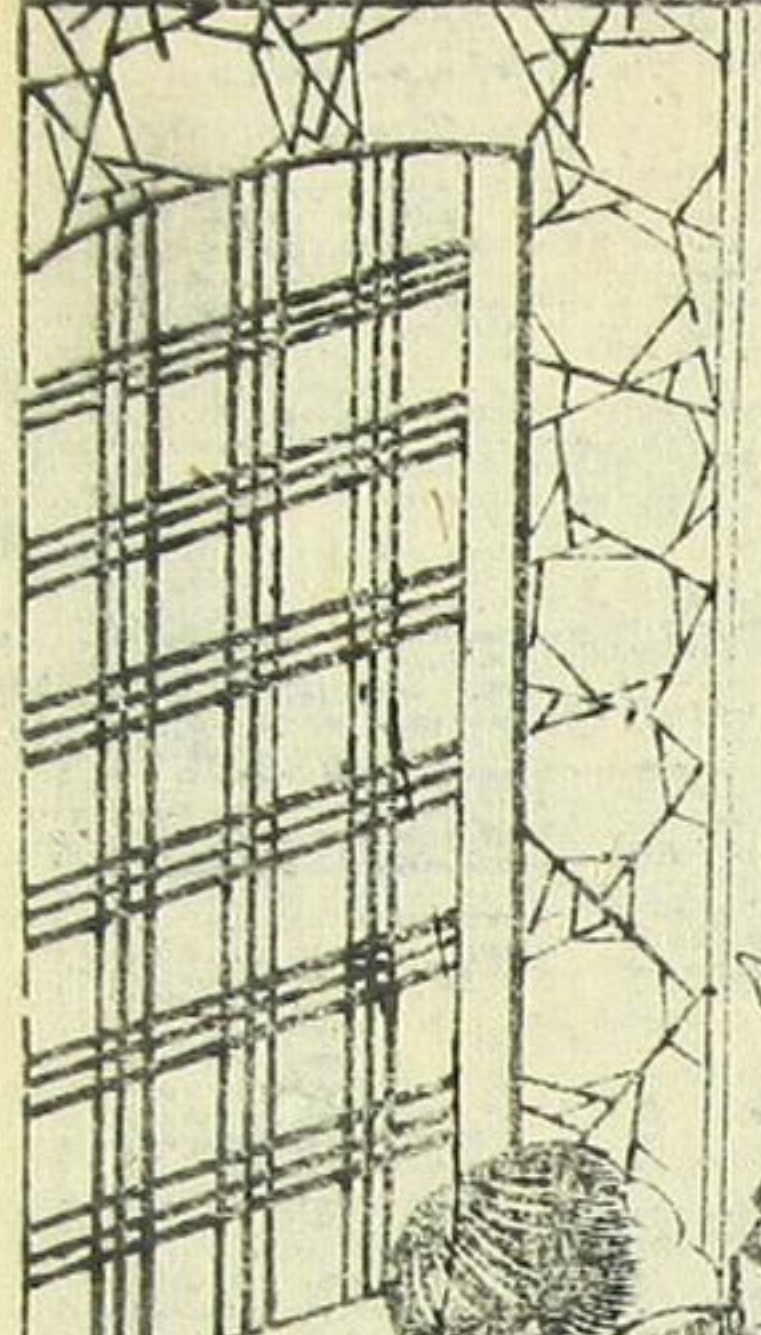
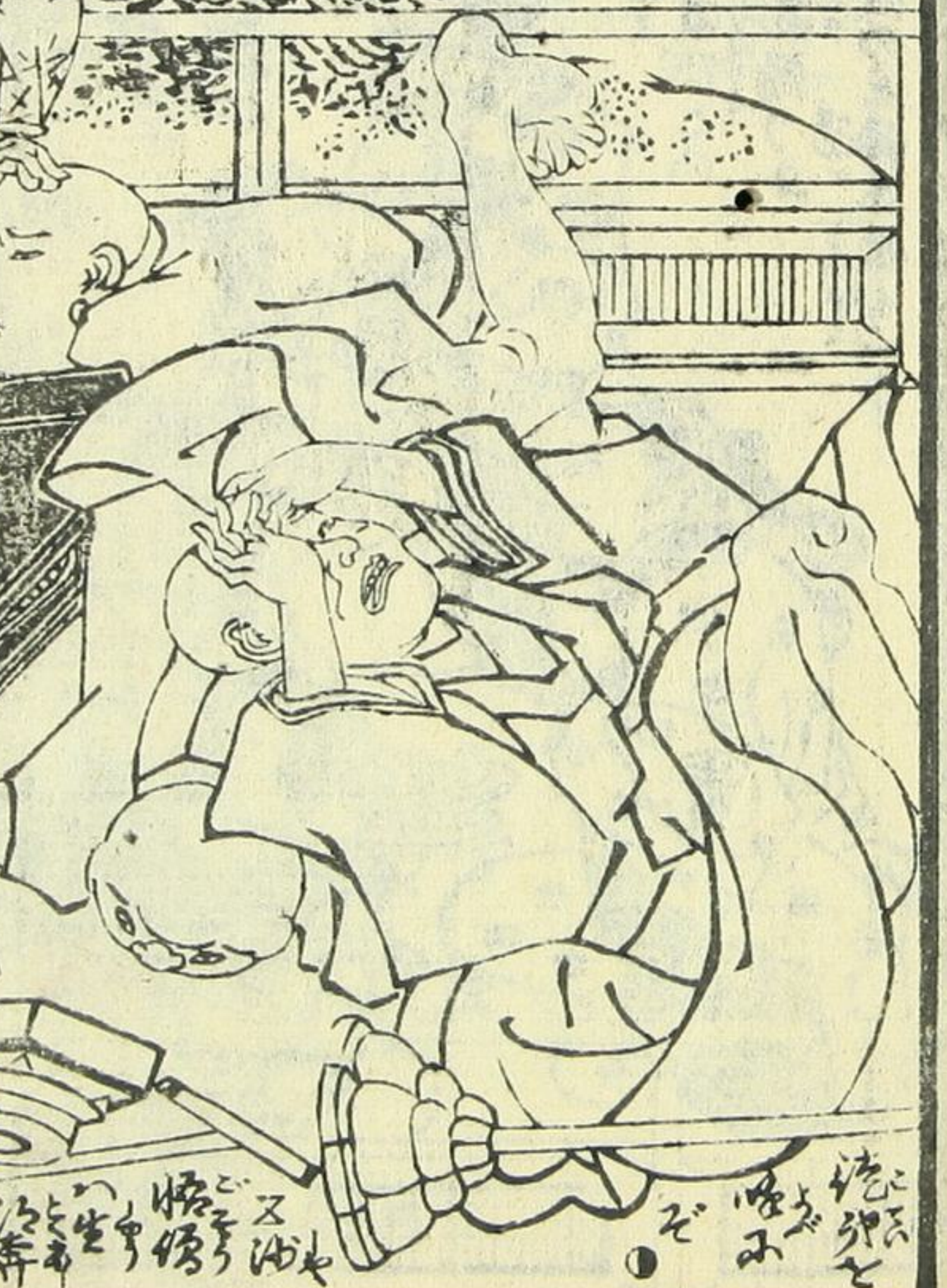
二
二
二
二

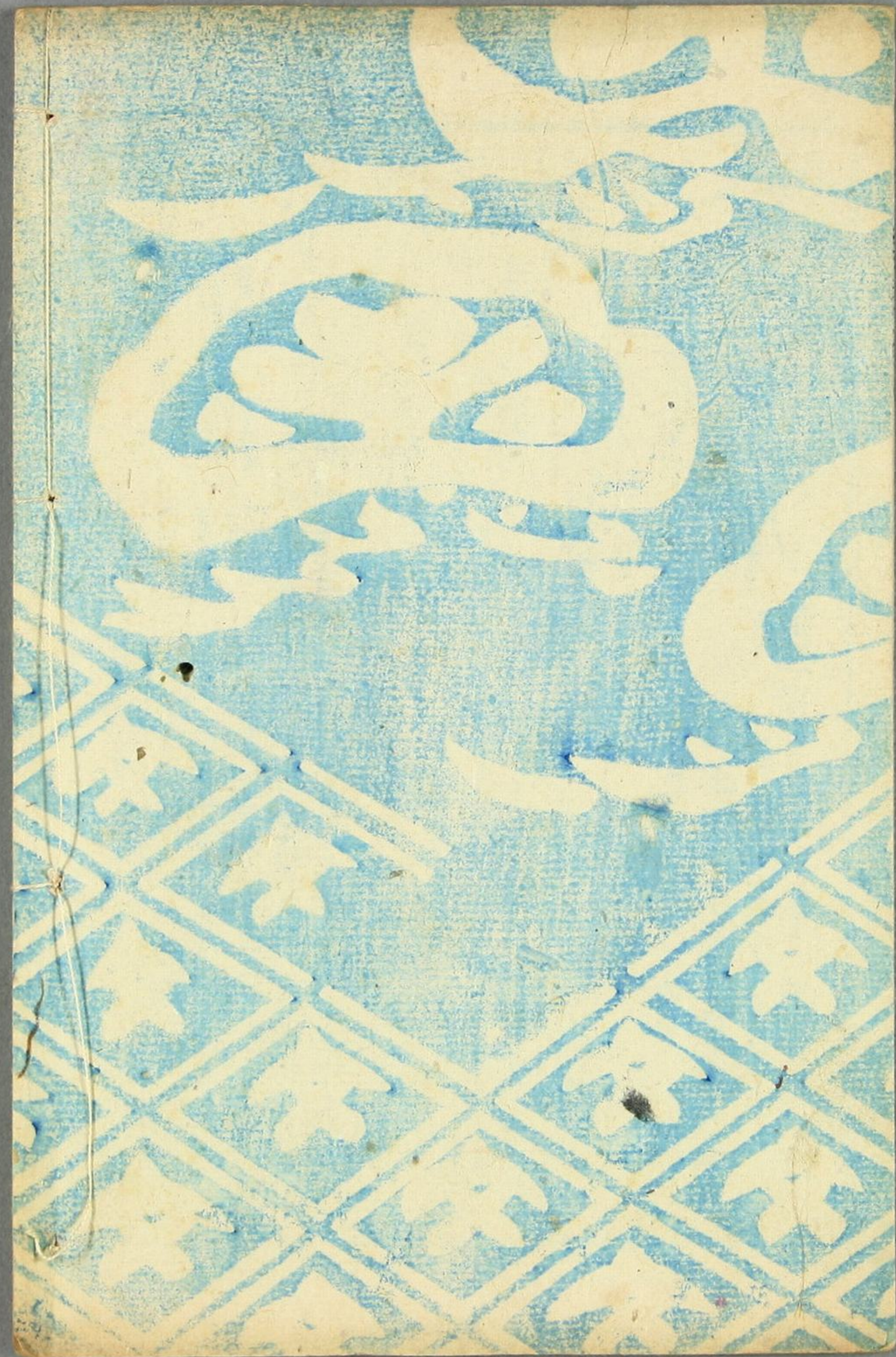
...

事さ家か何うて
 湯九の集り版
 ことし一年に熱
 米と秋の布
 偶洞一入交つて
 能せふかをばとめて
 二巻路をうわ
 女とよ我
 いと来るふ
 ららどは東慶の物令あて
 面天へ身経と来む借あ
 今ふの里小来りて天とよふ
 没せし客もさき家もあくま
 一宿ととんぬる者人そそが何

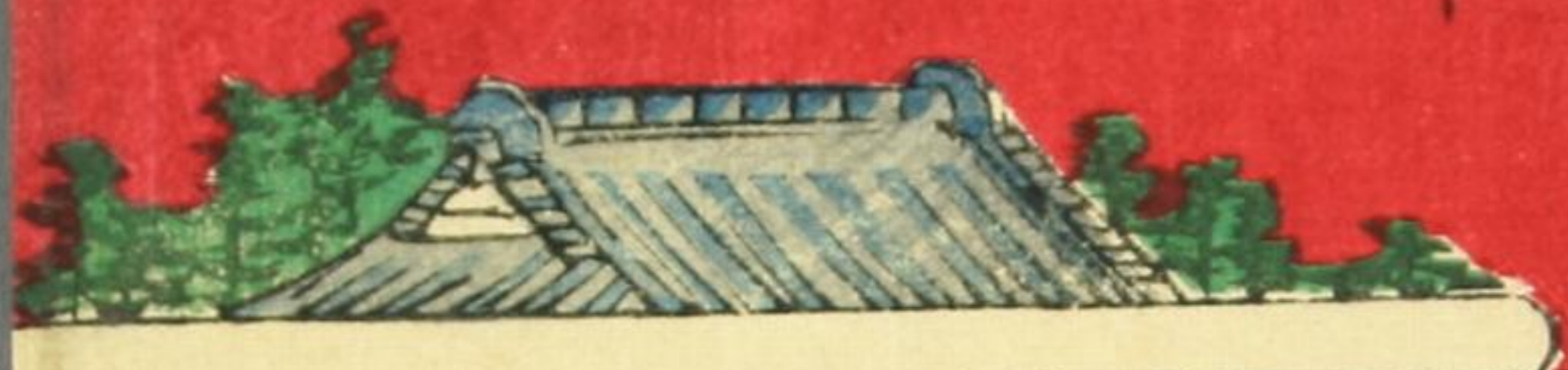


きまて長老の如きはしゆるあく何
 りといふ人多く東上太座とらげ
 ともいふ方ばふ里の
 何り然もふ一人を
 いれんを来も
 工とを
 湯九や
 一巻路
 事の云





西遊 庚申 通夜 譚 貳編



泉龍亭是正記
櫻齋房種画

榮光堂梓

